

# 月館町における地域づくりと生涯学習

## ～「月館町の地域づくり」アンケート調査結果より～

福島大学経済学部 山川 充 夫

### 1. はじめに

地域づくりは人づくりであるといわれる。地域における人づくりは、村おこしや町づくり運動が盛んになる以前には、公民館が主として社会教育という観点から行ってきた。福島県北地区17市町村における生涯学習の進捗状況は、高木広志の調査によれば、推進体制ができてきているのは8市町村（47%）である。しかし推進体制ができてきているといっても、それは教育委員会内部に設置されたものがほとんどであり、「生涯学習センター」が事務局となっているのはわずか1ヵ所にとどまった。また現時点で生涯学習を推進するにあたっては、「住民の意識を高めながら、学習機会を拡充することが重点施策であり」、「行政内部の生涯学習への関心がまだ十分でなく」、「まず事務局づくりが緊急課題である」段階にとどまっている<sup>※1</sup>。

本稿で「地域づくりと生涯学習」に関して月館町を事例にとりあげるのは、第一に月館町公民館（第3回生涯学習フェア）からの依頼で1995年11月5日に「地域づくりと生涯学習～今学ばずして、いつ学ぶのか」をテーマに講演したことを契機としている。第二には、その際、受講者を対象として「月館町の地域づくりアンケート」を実施し、これを取りまとめる必要があったことによる。

対象としての月館町は、福島市の東南東20km、伊達藩ゆかりの伊達郡の西南部に位置し、農山村地域にある。面積は44km<sup>2</sup>、人口が5,147人で、95年度の町当初予算は23億4,200万円であり、財政力指数が0.154と低く、過疎化や高齢化が進んでいる。教育文化面では、保育所1、幼稚園1、小学校2、中学校1校であり、公民館4、医院2、町指定文化財11である。高校進学率は96.6%であり、隣接町や福島市内の高校へ通学している。また、「山麗しく水清い里」の自然を大切に

し、葉わさびが特産品となっている。

町は1993年3月に第2次振興計画を策定し、『花と緑あふれる夢創造の里』を目指し、町づくりや人づくりの行政を進めている。91年4月には生涯学習推進本部を設け、本部長に町長があたり、教育委員会に事務局を設けて推進している。主な事業は、表1の通りであり、福島大学も開放講座や公開シンポジウムなどを開催して、月館町のまちづくりや人づくりに貢献している。

表1 月館町の主な生涯学習事業

生涯学習カレンダー
生涯学習フェア（福島大学公開シンポジウムを含む）
教育文化講演会
夢のバイオリンリサイタル
福島大学開放講座
『少年の翼』中学生のアメリカ派遣
千葉県白井町との交流
やまゆり花舞四季会社の花いっぱい運動

資料：月館町教育委員会など。

本稿では、第一に地域づくりの観点から月館町第2次振興計画の住民への浸透度とこれを知る契機を、第二に第2次振興計画の目標であるテーマの適否と人口目標の達成可能性を、第三に第2次振興計画の具体的展開である主要プロジェクトの認知度、特にF&G構想やその構想の中核となる第3セクター「花舞四季会社」への住民参加の程度を検討し、具体的意見を紹介する。第四には人づくりは生涯学習からという観点から、生涯学習の拠点としての公民館が住民にどのようにそしてどの程度活用されているかを検討する。最後に月館町の地域づくりの現局面を、発展段階という視点から住民自身に「自己評価」してもらい、地域づくりをさらに一歩進めるためには何が必要なのかを検討したい。

<sup>※1</sup> 高木広志「社会教育と社会体育」平成7年度東北町村教育長連絡協議会研究大会（於：秋田県田沢湖町）、1995年5月11日。

## 2 アンケート調査の方法と回答者の属性

月舘町の地域づくりに関するアンケート調査は95年11～12月にかけて行った。アンケート調査は生涯学習フェアをはじめとする月舘町公民館が実施した各種の会合への参加者に対して、無作為抽出によって実施した。回答者は108名であり、性別では男性が6割弱、女性が4割強であった(表2)。

表2 回答者の性別構成

	回答数	比率
男性	62	57%
女性	46	43%
計	108	100%

資料：アンケート調査による。

年齢別構成は、40歳代が最も多く、30歳代が続くが、これは調査の一部がPTAの会合の際に行われたことを反映している。また60歳代が第3位にあるのは、調査の残りの一部が公民館主催の地域づくり講演会の際に実施され、これへの参加者の年齢層を反映している(表3)。

表3 回答者の年齢別構成

	回答数	比率
20歳未満	0	0%
20歳代	4	4%
30歳代	24	22%
40歳代	42	39%
50歳代	8	7%
60歳代	21	20%
70歳代以上	8	7%
不明	1	1%
計	107	100%

資料：アンケート調査による。

回答者の職業別構成は、比較的分散しており、農業、会社員、公務員、主婦がそれぞれ約2割ずつ、商業以外の自営業と無職とが約1割ずつであった(表4)。

回答者の平日昼間の主な所在地は、特に決まっていないが6割強であり、ほとんど町内とほとんど町外とが約2割ずつである(表5)。町外の場合は福島市と保原町が多い。

表4 回答者の職業別構成

	回答数	比率
農業	20	19%
自営業(商業)	4	4%
自営業(商業以外)	10	10%
会社員	20	19%
公務員	19	18%
主婦(パート等を含む)	18	17%
学生	1	1%
その他の職業	2	2%
無職	10	10%
計	104	100%

資料：アンケート調査による。

表5 平日昼間の主な所在地

	回答数	比率
ほとんど町内	20	19%
特に決まっていない	66	62%
ほとんど町外	20	19%
計	106	100%

資料：アンケート調査による。

## 3 第2次振興計画の住民への浸透度

月舘町は1993年に「21世紀小手姫の里づくり」をテーマとする『第2次振興計画』を策定した。この第2次振興計画がどの程度、住民に浸透しているのかについて、その熟知度を聞いてみた。すると全体では「それほど知らなかった」が6割強をしめた。「以前から大変良く知っている」は2割弱であった(表6)。「知っている」程度は、性別では男性の方が、年齢別では年齢があがるほど高くなる。職業別では公務員で「大変良く知っている」割合が5割弱と高いが、これに次いで無職層が2割強となった。

「以前から大変良く知っている」及び「それほどは知らなかった」を選択した回答者が第2次振興計画を知ったきっかけは、「以前から大変良く知っている」

表6 月舘町の第2次振興計画について

	回答数	比率
以前から大変良く知っている	20	19%
それほどは知らなかった	66	62%
ほとんど知らなかった	20	19%
その他	1	1%
計	107	100%

資料：アンケート調査による。

場合は振興計画策定に直接的ないしは間接的に関わった者だけであり、「それほどは知らなかった」場合は『広報つきだて』などから知った比率が過半を占めている。ただ問題なのは振興計画策定に直接関わったにもかかわらず、「それほどは知らなかった」と答えている者が少なからずいたことである(表7)。

表7 振興計画を知る契機

	大変良く知っている		それほどは知らなかった	
	回答数	比率	回答数	比率
審議会委員や里づくり委員などで振興計画策定にかかわった	10	56%	5	8%
振興計画にかかわる地区懇談会に参加した	4	22%	11	17%
振興計画にかかわるアンケート調査に回答した	4	22%	8	13%
『広報つきだて』で知った	0	0%	36	57%
講演会・学習会などで知った	0	0%	0	0%
人づて(口コミなど)で知った	0	0%	1	2%
その他	0	0%	2	3%
計	18	100%	63	100%

資料：アンケート調査による。

#### 4 第2次振興計画目標に対する住民評価

振興計画は「花と緑あふれる夢創造の里—21世紀小手姫の里づくり」をテーマとしている。このテーマについて聞いたところ、「大変良い」ないしは「まあ良い」と答えた比率は全体の86%に及んでいる(表8)。性別では男性よりは女性で評価が高く、年齢別では年齢があがるほど評価が高い。職業別では農業で高く、これに公務員が続き、逆に自営業では評価はそれほど高くない。総合計画についての個別的記述意見は次のようなものがあった。「もっと現実的なテーマであってほしい」や「内容が全然見えない」、「振興計画は、町民が生活しやすいことを一番に考えて欲しい」、「意見をもっと取り上げてもらいたい」などである。

第2次振興計画は人口目標を趨勢型と政策目標型とに分けて設定している。1990年(基準年次)現在の人口は5,365人であるが、趨勢型では2000年に4,970人、2010年には4,605になると推計している。また政策

表8 振興計画のテーマについて

	回答数	比率
大変良いテーマである	39	38%
まあ良いテーマである	49	48%
それほど魅力あるテーマではない	12	12%
全くだめで変えるべきである	2	2%
計	102	100%

資料：アンケート調査による。

目標型では、基準年次をボトムとし、その後は増加傾向に転じ、2000年に5,506人、2010年には5,653人になると推計している。そして計画では目標的な意味を込めて、2000年に5,500人、2010年には5,700人になるとした。この計画人口目標に関して、アンケート回答者は「振興計画通りに進んでも、現状維持が精々である」とするのが半数をしめた。また「どんなにがんばっても人口は減少する」が「第2次振興計画が完全に実施できれば、目標達成は可能である」をわずかではあるが上回っている(表9)。人口増加については悲観的な意見が目立つ。悲観的な意見は、性別では男、年齢別では年齢が高い程強い。職業別では無職層で悲観的な意見が強く、主婦層で悲観的な意見が弱い。

表9 人口目標の達成可能性

	回答数	比率
振興計画に関わりなく人口は増えていく	0	0%
第2次振興計画が完全に実施できれば目標達成は可能である	21	21%
振興計画通りに進んでも、現状維持が精々である	50	51%
どんなにがんばっても人口は減少する	27	28%
計	98	100%

資料：アンケート調査による。

#### 5 主要プロジェクトの住民への浸透度

第二次振興計画では主なものとして表10のような6つのプロジェクトが進められている。認知度が最も高いのはハード事業としての小手姫公園の整備であり、次いでつきだてF&G構想である。認知度が低いのはソフト事業としてのヘルスコントロール運動や小手姫おもしろ塾である。認識度は、性別では男性よりは女性でわずかに高く、年齢別では60歳代以上で高く、職業別では公務員や主婦で高く出ている。ただし60歳代以上および主婦は「聞いたこともない」率も高く、両極分化している。

表10 主要プロジェクトの認知度

	ヘルスコ ン ト ロ ー ル 運 動	小 手 姫 お も し ろ 塾	小 手 姫 公 園 の 整 備	つ き だ て F & G 構 想	雇 用 住 宅 給 付 事 業	雇 用 住 宅 給 付 事 業	雇 用 住 宅 給 付 事 業	雇 用 住 宅 給 付 事 業	雇 用 住 宅 給 付 事 業	雇 用 住 宅 給 付 事 業		
良く知っていた	15	19%	17	22%	34	42%	31	40%	20	25%	21	21%
聞いたことはあった	18	23%	21	27%	26	32%	23	29%	34	43%	50	51%
聞いたこともなかった	45	58%	39	51%	21	26%	24	31%	25	32%	27	28%
計	78	100%	77	100%	81	100%	78	100%	79	100%	98	100%

資料：アンケート調査による。

なお回答者からのプロジェクト提案としては次のようなものがある(表11)。

表11 主要事業の認知度に関する記述回答例

- 人口を増やすには、住宅増加を必ずしてください。
- 休耕田、休耕畑が増える一方である。農業後継者がいない以上、都会より奥会津みたいな農業希望者を受け入れる必要があるかと思う。
- 月館町民の大きなマーケットをつくってほしい。
- 学校の近くに住宅地を確保してほしい。
- 町民が楽しんで、生き生きと生活できる場があればよいと思う。

資料：アンケート調査による。

さて「つきだてF&G構想」は地域づくりのもう一本の柱である。「つきだてF&G構想」は、第2次振興計画の策定に当たって若い世代から「他に誇れる何かがあるほしい」という声が多く聞かれ、彼らの議論のなかからF(フラワー)&G(グリーン)の考えが出されたことを契機としている。次のような意見が代表的なものである(表12)。

表12 こんな町であってほしい

私たちのまちにはその素地が、人々の心の中やこの大地で静かに息をしています。多くの町民の皆さんは、月館町の豊かな自然を誇りにして思い、そして花を愛しています。そこで、自信をもって紹介できる里、家庭から地域そして町全体が花と緑に囲まれた桃源郷をみんなで力を合わせて建設していきます。この桃源郷には、心身ともに元気で学び働く人々が多く住んでいます。そして地域では良好なコミュニティが形成されています。わたしたちの町を自信をもって紹介できる人々が住んでいます。

資料：『広報つきだて』133号、2ページ、1994年12月。

全体ではF&Gに対する認知度は高い。男性は人によって差が大きいが、全体としての認知度は高い水準にある。年齢別では20～30歳代の認知度が高く、職業別では公務員およびその他での認知度が高い。

またF&G構想の中核となる「やまゆり花舞四季会社」<sup>注2</sup>の認知度は、全体としては7割強で良く知られており、しかも「かぶ主」になるなど事業に参加している比率が高い(表13)。性別では女性の方が認知度や参加度が高く、年齢別では年齢の高い方が認知度や参加度は高い。職業別では農業や公務員、主婦などで高い。

表13 花舞四季会社の認知度と参加度

	回答数	比率
良く知っており、「かぶ主」になるなど事業に参加している	57	62%
良く知っており、まだ事業には参加していないが、今後は参加したい	8	9%
良く知っているが、今のところ事業に参加する予定はない	10	11%
あまり良く知らないのでもっと知らせてほしい	10	11%
あまり良く知らないし、特に知りたくもない	2	2%
全く知らなかったが、知れば関心が出てくる	4	4%
全く知らないし、知りたいとも思わない	1	1%
その他	0	0%
計	92	100%

資料：アンケート調査による。

アンケート記述によるやまゆり花舞四季会社への個別的な意見は表14の通りである。

表14 やまゆり花舞四季会社への意見

- もっと目に見える形で事業を展開してほしい。他の市町村の方が花がきれいに咲いているような気がする。
- もう少し詳しい手入れ法を。
- 各家庭の中だけではなく、もっと他の町の人が見に来るくらいの規模で植えてほしい。
- 全町民を対象に参加できるイベント(花まつりなど)
- 現在4種の球根が配布されていますが、開花期がそれぞれ違うので、種類ごとのプランターが欲しいです。
- 部落の自主性。
- 長く続くことを望んでいる。
- 適地を選んで植え付けることが大切である。
- 核となる公園がほしい

<sup>注2</sup>やまゆり花舞四季会社については、巻末資料を参照。

- 国体の時、他の町村では道沿いに花がいっぱい植えられてあったが、本町ではさみしかった。いろいろなイベント行事があるときは、にぎやかに咲かせて欲しい。
- 地域の高齢化が進む中、老人の力を発揮できるようにしてほしい。
- 品評会などを行う。
- 世界のゆりを集めた公園などをつくり、町おこしの起爆剤にしてはどうか。
- やまゆりだけでなく、季節の主な花々も事業の中に入れて行けば、季節ごとに花いっぱいになると思う。
- 月館町の産業おこし。やまゆりを本格的に栽培し、産品にしてはどうか。
- 道路、空き地などの草のはえている所などにも、花を植えて欲しい。
- 研究所の充実、モデル園、生産のためのゾーン。
- 花いっぱい誰でも訪ねてみたい町にしてほしい。

資料：アンケート調査による。

## 6 生涯学習拠点としての公民館利用状況

公民館は生涯学習拠点とならなければならないが、これがどの程度住民に活用されているかが、生涯学習展開の鍵となる。公民館の利用頻度は全体では「年に2～3度利用する」が最も多く、これに「月に2～3度利用する」と「ほとんど利用しない」とが続く(表15)。「月に2～3度利用する」比率が高くなるのは、女性や60～70歳に依存しており、職業的には主婦や無職層に依存する。これに対して、「年に2～3度利用する」のは、男性や40～50歳代であり、職業的には農業、会社員、公務員である。また「ほとんど利用しない」のは、どちらかといえば男性、年齢的には20～30歳代であり、職業的には自営業で高い。

公民館活動に対する参加の状況は、平均すると1人当たり1.51項目にのぼる。項目別に参加比率が高いの

表15 公民館の利用程度

	回答数	比率
週に1回くらいは利用する	5	6%
月に2～3回くらいは利用する	22	25%
月に1回くらいは利用する	8	9%
年に2～3回は利用する	33	38%
ほとんど利用しない	19	22%
計	87	100%

資料：アンケート調査による。

は「スポーツ大会やスポーツ教室、町民登山など社会体育に関するもの」が4割、や「作品展示会などの文化祭や教育文化講演会、町民写真コンテストといった芸術・文化をアツかったもの」が4割弱であり、これに次いで「昨年度の福島大学公開シンポジウム」である(表16)。

性別では男性はスポーツ関連を第1位とし、これに作品展示会や福島大学公開シンポが続き、女性では作品展示会等を第1位とし、これに婦人学級等、福島大学公開シンポ、スポーツ大会が続く。一人当たり参加項目数には性間での差はなかった。

年齢別では1人当たり参加項目数は若年層で多く、年齢層が高くなるにつれて少なくなる。若年層が他の年齢層と比較して相対的に高い比率をめているのは、「あそばね会」、作品展示会、スポーツ大会等であり、これらは年齢があがるにつれてその比率が低下する。これに対して、年齢層があがるにつれて参加比率が高まるのは地区婦人学級や町民教室、福島大学公開シンポなどである。寿楽大学等は高年齢層に限られている。

職業別では、「あそばね会」への参加率が高いのは公務員や主婦であり、地区婦人教室等へは主婦や無職層が多く、町民教室等へは主婦や農業者層が多く、作

表16 公民館活動への参加

	延べ回答数	比率
「あそばね会」などの少年教室や子供祭り、ちびっこクリスマス会など子供を対象としたもの	18	17%
「ヤングふるさと講座」など若者を対象としたもの	0	0%
地区婦人学級、女性講座、女性セミナーなど女性を対象としたもの	17	16%
地区公民館などの町民教室や社交ダンス教室・民謡教室・ワープロ教室などの町民教室といった成人を対象としたもの	13	12%
寿楽学級や地区高齢者学級などの高齢者を対象としたもの	4	4%
作品展示会などの文化祭や教育文化講演会、町民写真コンテストといった芸術・文化をアツかったもの	40	37%
スポーツ大会やスポーツ教室、町民登山など社会体育に関するもの	43	40%
昨年度の福島大学公開シンポジウム	28	26%
その他	0	0%
計	163	151%

注：比率は回答者数に対する比率  
資料：アンケート調査による。

品展示会等へは公務員、無職、主婦、会社員の順に高く、スポーツ大会等へは会社員、公務員、自営業、農業、主婦の順となっている。福島大学公開シンポへは主婦や無職が多いものの、比較的まんべんなく参加している。

個別的な要求は次ぎの通りである。講座関係では、パソコン教室、手話サークル、陶芸、心身の育成につながるもの（教養講座）、政治経済の話であり、開講日数の増加や夜間での開講が期待されている。若い主婦は1才から4才までを対象とした「親子ふれあいの会」のような集まりや、子供が楽しんで参加できるようなものを要望している。また年齢階層別の要求もあり、若者には青年たち・未婚グループにうけいられるような事業が、老人にはゲートボール以外のスポーツ（輪投げ等）の普及が希望されている。

その他公民館活動についての意見を聞くと、かなりの意見が寄せられた。第一は公民館の開館時間に関する意見であり、「夜の教室が数多くあれば、出席できるかもしれない」とか、「公民館を午後6時くらいに閉館にしてもらえると、仕事が終わってからも利用できるが、他の町に勤務していると用事があってなかなか利用できない」、「夜参加が無理な主婦ばかりであり、他活動に参加しても高齢者ばかりで興味がわからない。日中活動できるサークルがあれば、もっと家にいるもののつながりができ、友達もできると思う」とかがこれを代表している。

第二は運営方法についてであり、「公民館の開放」、「開かれたムードづくり」、「開かれた公共施設希望」などがその意見を代表している。第三は公民館の施設充実に関するものであり、「必要な資料がない。新刊書物を借りたいと思うが、二階に置いてあったり、借りづらい」とか「設備を充実すること」があげられている。第四は本館だけでなく、地区館の充実や地区毎のスポーツ推進事業の充実も希望されている。第五はPRについてであり、「各事業のPRは、できているがもう一歩踏み込んだ人集めを考えて活動してほしい」との意見があった。

## 7 月館町地域づくりについて

月館町の地域づくり発展段階を問うと、全体としては「模索期」ないしは「立ち上がり期」と考える回答者が多い。これらに「停滞混迷期」が続く（表17）。性別では男性は「模索期」を第1位に、「停滞混迷期」

を第2位とし、月館町の地域づくりがいろいろな意味において曲がり角にあると見ている。女性の場合は「立ち上がり期」が第1位とし、それなりの明るい展望を見ている。年齢別では中年層が「模索期」に集中し、高年層は「立ち上がり期」に集中している。若年層は比較的分散しているが、「立ち上がり期」が第1位となる。職業別では「模索期」を選ぶ率が最も高いのは自営業、会社員、公務員であり、「立ち上がり期」を選ぶ率が最も高かったのは農業と主婦である。

表17 地域づくり発展段階

	回答数	比率
萌芽期以前である	4	5%
萌芽期	7	9%
模索期	23	31%
立ち上がり期	20	27%
混迷期	5	7%
成長期	1	1%
停滞混迷期	14	19%
発展期	1	1%
その他	0	0%
計	75	100%

資料：アンケート調査による。

「萌芽期以前である」と回答した理由は、「未来に明るさが期待できない」や「リーダーはいても、まだまだ多くの人の信頼を集めて欲しい」、「リーダーがいない」などである。この段階を次ぎの段階に展開するには「強力なリーダーシップ」に代表されるリーダーの登場や育成が必要とされる。

「萌芽期」と回答した理由は、「過疎化に対する危機感がようやく出始めている」とか「思い切ったことを率先してできないから」、「まわりを気にして『他でやってない』ことに手を出さないから」などに代表される。これを克服するには「若者が魅力を感じる町づくりの具体的プランの作成」や「町民の意識高揚施策、特に若年層の参加意識を高める」、「失敗をおそれず、思い切ったことをする。また、できる環境をつくること。若い層の意思を取り入れること」など、若者への働きかけが重要であるとしている。

「模索期」を回答した理由としては、「選ばれた人達だけ本気があるが、次が感じられない」とか「各事業をまだ推進できないでいる」、「著しい成長がみられないので（一部の人しかわからないのではないか）」、「まだまだこれというものが見えてこない」など住民

に浸透していないことを上げている。これへの対策は、「ちゃんとしてピラミット組織で、地域、部落末端まで話をしこませる努力と、その気にさせることが必要と思う」とか「ソフト面の開発」、「町の指導的立場の人がビジョンをしっかり持って町づくりを行ってほしい」、「もっと、町民全体に浸透するようになりやすく指導すればよいのではないのでしょうか」、「職員の意欲」、「若者のサークル活動の推進など」などがしめされている。

月館町の地域づくりが「立ち上がり期」にあると回答した理由には、「各種ユニークな事業が計画されている」や「建築物など建ち始めているが、(森林公園、農村広場など)それが、なかなか結び付いていないようだから」、「以前より、様々な企画、計画が見られるようになった気がする」、「目ざめてきている人がみられるから」、「いろんな事業が目立っている」、「振興計画が平成5年に策定され、各種事業の取り組みがなされている」、「計画が進みつつある」といったように、総合計画に基づく主要プロジェクトが実施されていることを上げる場合が多い。

地域づくりをさらに前進させるためには、「事業内容、経過をPRする。特に、次世代の子供達へ」や「全町民へのPR、まだ一部の人達だけの町づくりのような気がする。各年齢層、各職場、各地区での意識の高揚が必要」、「意欲、限られた人の活動から一般の多くの人へ更に高めていく、広めていく」といったPRから、「町長がかわって、行政のやる気が見えてきた。が、町民の認識はまだまだ。あきらめムードの人達、引込み思案の人達、無関心の一部の若者達にどう認識させるかが大きな課題。いろいろな事業に各地区からこのような人達を強制的でも参加させ、認識を高める」必要性や、「全体計画の焦点化」、「実行力のある事業を必ず進めること」といった事業の絞り込みが提案されている。

地域づくりが「混迷期」にあると回答する理由には、「町の方向性が絞り込めない」とか「どの程度進んでいるのか細かいところがわかりづらい」などがあげられる。そしてこれを克服するためには「地域リーダー等の人材育成」や「町民にもっとアピール」することが必要だとしている。

地域づくりが「成長期」にあると答えたものはわずか1名であり、発展段階としての特徴をまとめることはできないが、その理由としては「町づくりに積極的である」ことがあげられている。

地域づくりが「停滞混迷期」にあると回答する理由は、「人口の減少」、「職場、交通、環境」、「交通事情の停滞」など指標化が可能な具体的な状況をあげている。さらに発展させるためには、「役場企画課にもっと力を入れて欲しい。役場企画課と町民の代表が意見を参考に企画を練る。そして、テストする。そのうち、それを各課にそれぞれ分担し実行する」、「一部の人が理解していても、ほとんどの人がなにも知らない。町民に行き渡る事業をしてほしい」といった振興プラン策定上の問題、さらには「若者の働く場所、遊び場」、「田舎町としてのハンディも特に感じないで生活することができる。空気の様な生活圏を作るのが地域づくりだと思う」、「交通の便、地域の特色がない。田舎らしさがほしい」、「交通網の整備、長短期滞在施設の充実。河川公園の設置。ミニ宅地供給。田舎らしい娯楽場の第三セクター実施。山林の公園化。花木、緑化等。若い年齢層が月館から出ていくのは、やむをえないと思う。しかし、月館に戻ってきて住みやすい、環境づくりが必要。子供を育てるのは大切なことであり、そのために教育期が大きな負担になる。若い子育て期の女性に受け入れられる施策」が必要であるとの提案が出されている。

最後に、地域づくりが「発展期」にあると答えたものはわずか1名であり、その具体的な記述は回答されていない。

## 8 おわりに

月館町の地域づくりは、第2次振興計画の住民による認知度という観点から見ると、必ずしも良好な水準にあるとはいえない。テーマそれ自体は比較的好意的に受けとめられているが、人口目標の達成については悲観的であり、精々、現状維持にとどまるとみている。目につきやすいハード整備や住民を「かぶぬし」にするF&G構想などの主要プロジェクトは、住民の認知度が高くあらわれている。月館町の地域づくりは発展段階としては、模索期ないしは立ち上がり期にあると見られている。この地域づくりをさらに高い段階に進めるためには、より多くの住民にこの地域づくりの考え方や事業の意味が理解されなければならない。

アンケート調査からはいずれの発展段階においても地域づくりをさらに一歩前進させるためには、なによりも住民自身による積極的な学習活動が要請されていることがわかった。ここに生涯学習の重要性が登場す

るのであるが、残念ながら月舘町でもこれを保障する生涯学習教育の体制は十分ではない。また地域における生涯学習の拠点たるべき公民館のハードとしての施設整備やソフトとしての情報やノウハウの蓄積水準はなお低く、これが公民館の利用状況の低迷や公民館活動への参加が高くない阻害要因となっている。月舘町の社会教育活動は他の市町村に比べれば高い水準にあるといわれているものの、なお解決すべき課題が多くある。地域づくりをさらに進めるためにもこれらの課題の克服が求められる。

なおアンケート調査の実施や地域づくり関連資料の収集にあたっては、月舘町教育委員会の渡辺洋一教育次長、佐藤宏明主査、斎藤勇一主事にお世話になりました。また高木広志教育長からは貴重なレポートを提供していただきました。末尾ながら感謝いたします。



(資料)

### やまゆり花舞四季会社事業の目的等

(目的)

当社は町の将来像である「花と緑あふれる夢創造の里」の建設を目指し、花そして緑を基本とした町民運動を住民参加により展開し、他に類の無い花と緑あふれる美しい町をつくとともに事業推進により町民が町に対する誇りと地域づくりへの自信を高め、良好なコミュニティの形成と花そして緑を愛する豊かな心を世界に伝えることを目的とする。

(事業)

当社は前条の目的を達成するために次の事業を行なう。

- ① 家庭の花いっぱい運動
- ② 地域の花いっぱい運動
- ③ 花そして緑の研究
- ④ 自然環境の保全
- ⑤ 心豊かな人間教育
- ⑥ その目的達成に必要と認められる事業

< F & G 構想事業 >

(目標)

\*花と緑あふれる夢創造の里の「花」「緑」を基本にした町民運動を住民参加により展開し他に自信を持って紹介できる花と緑の里を造る。結果として、町民が月館町に対する誇りと地域づくりへの自信が復興し良好なコミュニティの形成が図られる。

\*職員には、町民参加が成功するよう施策を展開することにより、行政と町民との絆が深まり将来に向かって良好な関係の形成が図られる。

\*より一層この運動を充実させ食用として珍重されている「ユリの根」を遊休農地を活用し「ムーンリリー」として販売し所得の向上に結び付ける。

\*「老後は家族と一緒に生活し元気で働きたい。」アンケートの結果多くの町民が望むことでした。そこでこの事業を展開し、特にお年寄りには花を育てそして見て楽しみ、更には「おし花」をつくり商品化販売し、お年寄りの生き甲斐に役立てたい。

\*町民が自慢できることのNo.1は豊かな自然、緑である。それらを育てる他に誇ることができる、自他共に認めるシンボルを造りだす。

\*ユリを基にネットワークづくりを進め「ユリ情報」の発進基地として月館町をPRする。

■ 具体的な狙いや条件は何？

◎町民の心に根づく自慢できる花と緑に満ちあふれる町をつくる。

- 1) 見劣りしないで話題性があること。
- 2) 町民に大きな負担を強いることなく、みんなが楽しめること。
- 3) 町民の自主性を引きだし、それを自信に結び付ける。
- 4) 地域及び家族の良好な人間関係を形成する。
- 5) 構想を成文化し誰もが理解できるものとする。
- 6) 職員および町民総参加の積極的推進と県等あらゆる機関をプロジェクトに巻き込む。
- 7) 「育てるよろこび」→情操教育につなげる。
- 8) 振興計画の将来像を視覚的に具現化する。

- 9) 核家族化がすすむ中お年寄りと子供たちの良好な人間関係を形成する。「おじいちゃん、おばあちゃん孫さんたちに将来大きな自慢につながる贈り物を残してください。」「子供たちには、君達を立派に育ててくれたお礼に、一緒に花を育ててください。」

#### ■ 具体的に何をやるのか？

- 1) 学校の花いっぱい運動をより一層推進する。
- 2) やまゆり花舞四季（株式）会社設立し、全町をあげて花いっぱい運動を推進する。また、花舞四季証書として町の木「ケヤキ」を使い「組木の表札」を配付する。
- 3) 大字単位に地区の花を決め、主要幹線道に看板を設置する。
- 4) 町の花「山ゆり」、町の木「けやき」は公共施設及びシンボルゾーンに記念植樹等のユニークなアイデアでエリアをつくる。
- 5) 花いっぱいの「フラワーロード」を建設する。
- 6) F & G研究所を設立し、花いっぱい運動の調査指導や「おし花」の研究など楽しみながら調査研究を行なう。
- 7) F & Gの日を制定し全町民で花いっぱい運動を推進する。
- 8) 全世帯に配付したユリの花のコンテストを開催し表彰する。  
 (個人賞) ・大賞1 ・ほか大字単位に表彰  
 (団体賞) ・公民館や学校など公共施設の表彰  
 ＊賞品は町の商店の商品券（町経済活性化に少しでも寄与したい）  
 ＊花舞四季会社なので配当として表彰を考えるが、事業が成功し経済ベースにのった時点全町民に外国旅行などをプレゼントする。

#### ■ 展開計画は次のとおり

##### ◎6年度

- 1) やまゆりの球根等を全世帯及び事業所に配付する→F & G構想のPR
- 2) 会社設立準備
- 3) 会社の設立（総会）  
＊11月を目標
- 4) F & G構想のPRと参加推進
- 5) CI戦略の導入の検討事前調査（小手姫のイラストなど町のシンボルをみんなで決めていく）

##### ◎7年度

- 1) 花舞四季（株式）会社に補助金交付
- 2) 事業計画にのっとり事業の推進
- 3) 証書としての「表札」を配付
- 4) ユリの花のコンテスト
- 5) 地区の花の決定
- 6) F & Gの日制定

##### ◎8年度

- 1) 花舞四季（株式）会社に補助金交付
- 2) 事業計画にのっとり事業の推進
- 3) ユリの花のコンテスト
- 4) F & G研究所設立
- 5) 地区看板の設置

##### ◎9年度

- 1) 花舞四季（株式）会社に補助金交付
- 2) 事業計画にのっとり事業の推進
- 3) ユリの花のコンテスト
- 4) F & G研究所設立
- 5) シンボルパークの建設（世界のユリ園）

##### ◎10年度

- 1) 花舞四季（株式）会社に補助金交付
- 2) 事業計画にのっとり事業の推進
- 3) ユリの花のコンテスト
- 4) シンボルパークの建設（世界のユリ園）
- 5) 「おし花」の商品化
- 6) 「ムーンリリー」商品化

資料：月館町役場による